

オリジナリティのある文献レビューに向けて

—大学院の「講演者になるゼミ」の実践から—

教育心理学コース 田中 麻紗子
教育心理学コース 市川 伸一

On the process of conducting a good review study:
Tips from a “lecturer-like activity” at The University of Tokyo

Masako TANAKA and Shin'ichi ICHIKAWA

How should we (researchers) conduct and present a good review study? Although graduate students receive some guidance on how to write a research paper, they are rarely provided instruction about how to perform a review study. Due to their limited knowledge and experience, many students tend to think that a good review simply comprises reference to many previous research studies. In this paper, we point out that a good review study needs to be original, comprehensive, and easy to understand. Moreover, we offer directions for conducting a good review study, and provide key points drawn from interview data with young psychology researchers who have published review studies in peer-reviewed journals.

目次

- 1 文献レビューに関する大学院ゼミ
- 2 オリジナリティの重要性
- 3 よいレビューの3要件
 - A 網羅性：先行研究を広く網羅していること
 - B オリジナリティ：独自のアイデアを含むこと
 - C わかりやすさ：読み手が理解しやすいこと
- 4 どのようにレビューを進めるか
 - A 問題意識（レビュークエスション）の成立
 - B 文献を収集する
 - C 文献を読んでいく
 - D 問題の解消，主張のひらめきのために
 - E レビューの完成に向けて
- 5 ゼミ受講者へのインタビューに見るレビュープロセス
 - A 最初から主張はあるのか
 - B ひらめきはどのように生まれるか
 - C ひらめいたら終わり，ではない
- 6 結語：あらためて「よいレビューをするには」

1 文献レビューに関する大学院ゼミ

本論文の第2著者である市川伸一教授の大学院ゼミは、「研究者の活動を模擬することで学ぶ」という趣旨の Researcher-Like Activity (RLA) が取り入れられ

ている（市川，2001）。毎年度，前期は，「査読者になるゼミ」ということで，学会誌に掲載されている論文を素材にして，その論文の査読者になったつもりで担当者が査読コメントを書き，受講者全員でそれをめぐって議論する。これは，論文を批判的かつ建設的に検討することがねらいである。一方，後期には，「講演者になるゼミ」が行われる。こちらは，受講者それぞれが特定のテーマを選び，最近の研究までを含めてレビューし，最終的には学会での講演者になったつもりで，その分野の動向を講演形式で発表する。このねらいは，あるテーマについての研究に精通するとともに，自分なりに整理して，わかりやすいプレゼンをする能力を身につけることである。

RLAは，普通なら学問の世界でベテランと言われるような年代の研究者が行う活動を，あえて大学院生が行うことが特徴である。つまり，研究者は，自分の興味をもったトピックについて，データをとったり分析したりするだけではなく，他者の論文を広く理解して自分の研究の展望をもったり，学生や異分野の研究者にわかりやすく解説したり，査読者として他者の研究を評価したりする。こうした活動は，研究そのものというよりその周辺部分にあたる活動であるが，ひいては自分の研究を高めるための視点を豊かにすることにもなるだろう。

本論文は，1994年から東京大学で行われてきた「講

演者になるゼミ」の蓄積を踏まえて、文献レビューのあり方とその教育方法について報告し、考察を加えたものである。ここでいうレビューとは、口頭による講演形式のものに限らず、論文化されたものも含む。実際、ゼミでの発表のあと、その内容をレビュー論文（展望論文、評論などと呼ばれる）として学術雑誌に投稿し、採択されるという例もある。本論文では、発表形態を問わずレビューという作業の共通項を取り出して議論する。また、通常の研究論文における序論や問題・目的といった部分は先行研究について論じるという点でレビューと共通する部分もある。修士論文、博士論文を執筆する学生は、このゼミでのレビューを序論として使うケースが多い。

よいレビューをするには、そもそも、「よいレビューとはどういうものか」というイメージが形成されていなくてはならない。本ゼミでは、ふつう博士課程1年生に割り当てられる役割として、学期の初期に、「よいレビューとは何か」という見解を発表し、それをめぐって討論するという時間がとられる。ここでは、前年度までの先輩たちの発表内容も踏まえて行われるので、しだいによいレビューについての考察が蓄積されてきており、ゼミとしての共通キーワードのようなものもできている。この場で強調されてきたことは、ただ先行研究を網羅することが良いレビューの条件ではないということである。そこで、これまでの発表・議論に基づいて、「よいレビューとは何か、それを実現するにはどうすればよいか」をまずまとめていく。さらに、本論文では特に、よいレビューはどうしたらできるのか、という作成プロセスについて述べていくことにする。

筆者らの専門分野は心理学（とくに、認知心理学、教育心理学）であり、伝統的には、学部学生時代から、どのように研究を行うか、それを論文においてかに記述・報告するか、ということについては重点的に指導を受ける。しかし、どのようにレビューをするか、ということは指導されることが少ないように思われる。強いていえば、文献検索の方法などのテクニカルな側面や、盗用・剽窃などに関する倫理的な注意ということになろう。すると、レビュー経験の少ない学生は、先行研究ではどのようなことが行われていたか、という事実の報告に終始してしまうことが多い。たとえば、懇切丁寧な教科書のようなレビューがよいレビューと思いがちである。本ゼミならびに本論文では、単に先行研究を網羅的に列挙したのではなく、アイデアや主張の込められた、「オリジナリ

ティのあるレビュー」を目標とする。

2 オリジナリティの重要性

そもそもレビューとは何だろうか。例えば心理学のレビュー論文を掲載する雑誌『心理学評論』は、「論文は、単に一つの観察、実験などの研究の発表を主目的とするものでなく、(1) それらを踏まえたより広い立場からの理論的考察、(2) 理論的展望、総説、(3) すでに発表された論文に対する批判、討論、(4) 各専門あるいは境界領域活動の現状と評価、などを内容とするものが望まれる。」(心理学評論投稿・執筆の規定2011年改訂版 p.2)としている。あるいは『広辞苑』によると「批評、評論。物事を評価し論ずること」、『ジーニアス英和辞典』によれば「再調査・概観・展望・批評」とある。これらを総括すれば、レビューとは「過去の研究を改めて調査して全体を広く見渡したうえで、将来に向けて自分の意見を論ずること」と考えることができる。レビューという作業には、「網羅的な知識を得ること」と、「独自に考えること」の2側面が必要といえる。教科書的なレビューをしがちな学生が見過ごしているのが、この独自性、すなわち主張のオリジナリティという側面である。そこで、文献の網羅性とオリジナリティのある主張という2側面に応じて、レビューを4つに分類し、未熟レビュー、知識偏向型レビュー、主張偏向型レビュー、模範レビューと名付けておく (Fig. 1)。

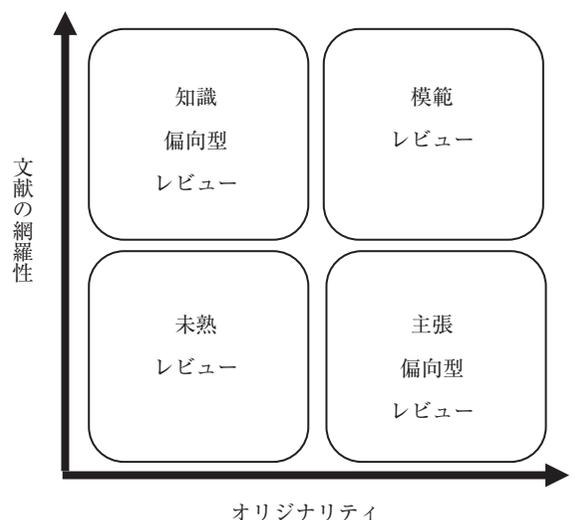


Fig. 1 レビューの2側面による分類 (榊, 2006; 篠ヶ谷, 2007などを一部改変)

「未熟レビュー」とは、Fig. 1において文献の網羅性・主張のオリジナリティとも低い位置にあるもので、参照された文献数が少ないため説得力に欠け、オリジナリティにも欠ける。もちろん、このようなレビューでは読者にとって価値が低いと言わざるをえない。また、前述したように、多くの学生が陥りがちなレビューの形態が、「知識偏向型レビュー」である。これは、文献の収集は網羅的であるが、主張への独自性が弱く、単なる知見の羅列に終始してしまうタイプである。しかし、とにかく自分なりの主張をすればいいというわけではない。「主張偏向型レビュー」とは、知識偏向型レビューと対照的に、文献の網羅性は低いわりに主張ばかり強いもので、その主張を裏づける先行研究からの根拠に欠けるものである。せっかくのオリジナルな主張があったとしても、読者を説得する力を持たないという点で問題がある。

そこで、2つの側面のバランスのとれた理想的なレビューの形態が「模範レビュー」ということになる。参照された文献が網羅的であり、さまざまな研究を踏まえたうえで、オリジナルで明確な主張を提示しているレビューということになる。本稿中でよいレビューとしているものはこれを典型とする。

3 よいレビューの3要件

前節では文献の網羅性とオリジナルな主張を兼ね備えた模範レビューが理想であるとしたが、それだけでは具体像が見えにくい。ここでは、上記2側面に、「わかりやすさ」を加えた3つをよいレビューの要件とし、より具体的にその内容を示したい。

A 網羅性：先行研究を広く網羅していること

レビューというからには、あるテーマについて、十分な先行研究に関する情報を提供するものでなくてはならない。また、主張に関連する先行研究を多く参照するほど、そこから引き出された結論は説得力を持つだろう。そこで、多くの先行研究を丁寧に読み、自分の主張を支えるデータとする。ただし、ここで解釈の恣意性にも注意が必要である。どれだけたくさんの先行研究を引用したとしても、自分の主張を支持するために都合の良い研究だけを引用していたり、自分に都合よく勝手に解釈をしていたりすれば、レビューを受け取る側に偏った情報が与えられてしまう。

多くのレビューは、レビュアが先行研究を引用しながらストーリーを組み立てる記述的レビュー（質的

レビュー）である。このようなレビューでは、著者の主観によって結果が導かれることになる。ゆえに、同じ研究を拠り所としていても著者によって結論が異なることがありうる（e.g. Rosenthal & DiMatteo, 2001）。記述的レビューにおいても、自分の主張のために解釈を歪めたり主張のために都合のよい研究のみを参照したりすることなく、バランスのとれた記述を心がけなくてはならない。

先行研究を網羅するために、どのように研究を収集するかは、後の節で述べる。ここではさらに、先行研究をただ集めて紹介するだけではない扱い方を述べておこう。記述的レビューと対をなすものとして、「量的レビュー」と言えるものがある。メタ分析など統計的手法を用いて、先行研究を統合するレビューの手法である（教科書として、芝・南風原, 1990や丹後, 2002などを参照）。統計的手法を用いることによって、主観の影響が比較的少なくなり、議論の説得力を支えることができる。メタ分析は先行研究をデータとして独立変数の効果について信頼性の高い知見を与え、先行研究の統合に大きく寄与する。それだけでなく、調整変数分析¹⁾の手続きを加えて、研究間で結果が異なることを説明しうる要因を提示することにも使われる。手法としてのメタ分析は文献の網羅性の活かし方と言うことができるが、このような活用法があることも考慮に入れると、メタ分析をどのような観点で行うかはオリジナリティとも密接に関連してくる。

B オリジナリティ：独自のアイデアを含むこと

誰がしても同じようなレビューを書いても、読み手に与える示唆が少なく、優れたレビューとはいえない。もちろん、まだ誰もレビューしていない領域をレビューすることも新たな情報を提供するという意味では意義があるが、それにとどまらずオリジナルなアイデアを含むことが求められる。最初からオリジナルなレビューを考え付くことは困難だが、オリジナリティの手がかりはいくつかある。レビューにおけるオリジナリティの出し方をここでは大きく2つ、「知見統合」と「パラダイム提案」とに分類し、さらにそれぞれの下位に2つずつの下位分類を想定した（Fig. 2）。以下では、その内容を述べるとともに、例となる論文を引用した（文献は榊, 2006や深谷, 2009を参考に選定した）。論文の引用は、心理学の論文にしぼっている。

● 知見統合

知見統合とは複数の知見を統合することによって

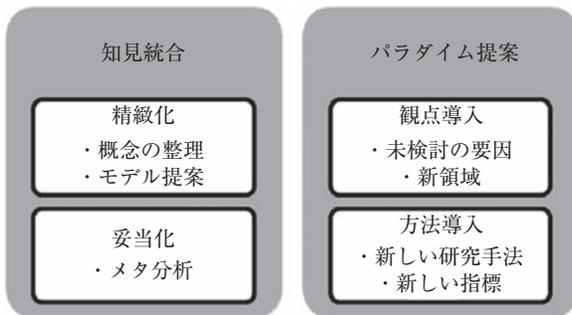


Fig. 2 レビューのオリジナリティの分類

個々の研究を超えた、より包括的で重要な知見を得るものである。一つの知見では得られなかった議論を与えるところに、個々の調査や実験研究とは異なるレビューの特殊性がある。この中に、「精緻化」と「妥当化」という2つの下位概念を置く。

精緻化とは、複数の知見を理解しやすいよう整理したり、複数の知見を統合的に説明可能なモデルの提案もしくは改良を行ったりすることである。すなわち、それまで関連づけられていなかったところに、関連づけを成立させたものと言える。これは一領域の知見を統合するだけでなく、全く異なる複数の領域の知見を統合することもある。どのような切り口で先行研究を整理するか、どのような発想で先行研究を統合するか、というところでオリジナリティが問われる。たとえば、次のようなレビュー例をあげることができる。

- ・Russel, J. A. & Carroll, J. M. (1999). On the bipolarity of positive and negative affect. *Psychological Bulletin*, 125, 3-30.

感情がどのような次元で説明できるか、という問題について、2つの対立する意見を概観し、それらの矛盾する見解を解消するモデルの提案を行っている。

- ・杉森絵里子・楠見孝(2007)メタ記憶におけるソースモニタリングエラー—インプット・アウトプットモニタリングの観点から— 心理学評論, 50, 99-118.

ソースモニタリングエラーをインプット情報のモニタリングとアウトプット情報のモニタリングに明確に分類し、その差異を検討している。

妥当化とは、メタ分析等の手法を用い、これまで

得られた知見の信頼性を高め、議論をより妥当なものにすることである。ここでいう妥当とは、科学的命題の確かさが高まるということを目指す。ある結論を出した一つの研究のみでは、そのサンプルサイズの問題や、限られた条件での結果なので、必ずしも安定した結果が得られるわけではない。複数の研究を集める事で要因の効果についてより妥当な主張ができることになる。メタ分析を行うレビューは、本邦ではまだ多いとはいえないため、それだけである程度価値のあるレビューにはなるが、よりオリジナリティのあるレビューとするには、どのような観点でメタ分析をするか、あるいはその結果からどのような考察に至るか、という点も重要である。

また、自分の主張を裏付けるような研究を行い、レビューに加えることで説得力を高めることもある。たとえば、シミュレーションモデルの作成や実証データを取るなどの方法がある。どちらも主張から導かれた予測と一致する結果が得られるかが検討される。

たとえば、メタ分析を利用したレビューとして次のような例がある。

- ・Rohrbeck, C. A., Ginsburg-Block, M. D., Fantuzzo, J. W., & Miller, T. R. (2003). Peer-assisted learning interventions with elementary school students: A meta-analytic review. *Journal of Educational Psychology*, 95, 240-257.

小学生の仲間に援助された学習 (peer-assisted learning; PAL) に対する介入を実施した効果とその他の独立変数 (教科など) の効果をメタ分析によって検討し、特にマイノリティや収入の低い家庭の子どもなど弱い立場の生徒に対してPALが有効であることを示した。

● パラダイム提案

次に、パラダイム提案とは、先行研究では見過ごされてきた問題点を指摘あるいは批判し、新しい視点から従来の知見の見直しを図ったり、新しい研究方法を提案したりして、今後の研究を方向づけようとするものである。この中には、「観点導入」と「方法導入」の2つの下位概念を置く。

観点導入とは、これまで見過ごされてきた問題をクローズアップしたり、一貫しない現象を説明可能な要因を見出したりして、新たな研究の方向性を示唆することである。誰も手をつけていないような新しいテー

マに着手することも観点導入の一つである。先行研究とは異なる方向性に向かうことから、ある程度先行研究の批判をすることも必要となる。たとえば、次のようなレビューがある。

- Craik, F. I. M. & Lockhart, R. S. (1972) Levels of processing: A framework for memory research. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 11, 671-684.

当時主流であった記憶の2過程説が、短期記憶におけるリハーサル回数によって長期記憶に移行するとしていたのに対し、記憶の強さは記録時にどれだけ深い情報処理をしたかによって規定されるという新たな視点を導入した。

- Pylyshyn, Z. W. (1973) What the mind's eye tells the mind's brain: A critique of mental imagery. *Psychological Bulletin*, 80, 1-24.

従来の視覚的イメージ研究は、イメージを心の中の絵のようなもの (picture metaphor) として素朴にとらえていたことを批判し、人工知能研究を背景に、構造や意味をもった命題的表象としてとらえるべきであることを主張した。

方法導入とは、信頼性の高い指標や実験方法を考案したり、先行研究とは異なるモデルを考案したりして、今後その分野の研究を行っていく上で有用なツールを提供することである。次のようなレビュー例をあげることができる。

- Nelson, T. O., Narens, L., & Dunlosky, J. (2004). A revised methodology for research on metamemory: Pre-judgment recall and monitoring (PRAM). *Psychological Methods*, 9, 53-69.

「学習度判断パラダイム」における新たな実験方法を提案し、それにもとづく結果の分析・提示方法を解説するとともに、この方法論によって先行研究で示されていた現象をうまく説明することが可能になることを示した。

- McClelland, J. L. & Rumelhart, D. E. (1981). An interactive activation model of context effects in letter perception: I. An account of basic findings. *Psychological Review*, 88, 375-407.

単語認知に関する研究を概観したうえで、神経回路を模した並列分散処理モデルに中間ユニットや逆伝搬法アルゴリズムを導入し、新たなモデル化の道を開いた。

以上、レビューにおける意義について、下位概念として4つの要素を想定したが、これらは明確に分離可能なものというわけではない。現象を説明する新たなモデルを提案するには、従来の研究をまとめるだけでなく先行研究にはない要因を組み入れなくてはならないかもしれない。また、要素は1レビューにつき1つというわけではなく、複数の要素が取り入れられる。たとえば、現象の説明を可能にする新しい要因についてメタ分析を行って示唆するレビューでは観点導入と妥当化の要素が現れる。また、取り入れられた個々の要素にもレベルがある。どの要素に重点を置いて意義づけるかということも、レビューアの考えによって異なってくる。

ここでは、レビューのオリジナリティにはどのようなものがありうるのか、ということのアイデアの一端を示したに過ぎない。実際に個々のすぐれたレビュー論文にあたると、その多様性が見えてくるだろう。

C わかりやすさ：読み手が理解しやすいこと

最後の要件として、よいレビューとはその内容が読み手にとって理解しやすいものであることを挙げたい。わかりやすい発表や論文にするための大前提は、レビューに明確な問いがあることである。調査や実験などの研究と同様、レビューにおいても設定された問いに答えを提供することが目的となる。確たる問いが存在しなければ、レビューアの主張も生まれないし、どのように文献を収集していけばいいかの指針も持ちえない。結果として、レビューの受け手にとってもレビューアが何を伝えたいのかわからないということになってしまう。

しかし、最初から明確な問いを立てることは十分な知識のない場合には難しい。そこで、当初は曖昧な問いからスタートすることもある、という柔軟な姿勢も認めるほうが現実的である。レビューを進める中で自身のレビューの問いは何かを意識することで、自分が取り組む問題を明らかにしていけばよいのである。レビューは自分の設定した問いに対して、過去の文献の中から自分なりの答えを見つける作業ということもできるだろう。最終的に、レビューができあがったときには、問いが明確化され、受け手はそのレビューを

「問いに対しての答え」として受け取ることになる。

そうして得られたレビューの発表や論文の内容は、ただ羅列するのではなく、わかりやすく整理して示すことが重要である。また、レビューに触れる人がその領域の熟達者とは限らないため、研究領域の違う人間にもある程度伝わりやすい構成を心掛けることが望まれる。自分自身がよく理解していないとわかりやすく伝えることもできない。わかりやすいレビューとするためには、自分のレビューの特長、いわば「セールス・ポイント」がどこにあるかが十分明確になっていなくてはならない。

ただし、これもまた、発表や論文執筆を始める前に十分明確になっているとは限らない。むしろ、表現しながら、わかりやすく構成しようと試行錯誤したり、一度はできあがった表現を見直したり、他者に見せて意見をもらったりしながら、しだいに明確になっていくことが多い。市川（2000）は、高校生に対する小論文執筆プロセスの解説の中で、書くという行為は、すでに頭の中にあるアイデアを文章にすることではなく、書くことを通じてこそアイデアがより精緻化されたり明確化されたりすることを述べている。いわ

ば、人間は「考えたことを書く」のではなく、「考えるために書く」ということである。レビューにもまさにこのことはあてはまるだろう。発表の練習や論文の推敲も、アイデアを深め、再表現を促す機会として大切にしたい。

4 どのようにレビューを進めるか

以上が、よいレビューとはどのような内容を備えているかについてのまとめであった。それでは、実際にどのようにしてレビューを作っていくのか、その活動のプロセスを考えてみよう。

Fig. 3のように、レビューのプロセスの中では、問題意識の成立、文献スキミング、主張のひらめき、文献スキミングという流れが連続的に、あるいは、後戻りしながら続いていく。文献スキミングの中で問題意識が精緻化されていくこともある。十分な研究を収集したうえでオリジナリティのある主張ができあがれば、あとは内容をまとめレビューの形にしていくことになる。しかし、思いついた主張が先行研究と整合しなかったり、その主張が既に他の人物によって成され

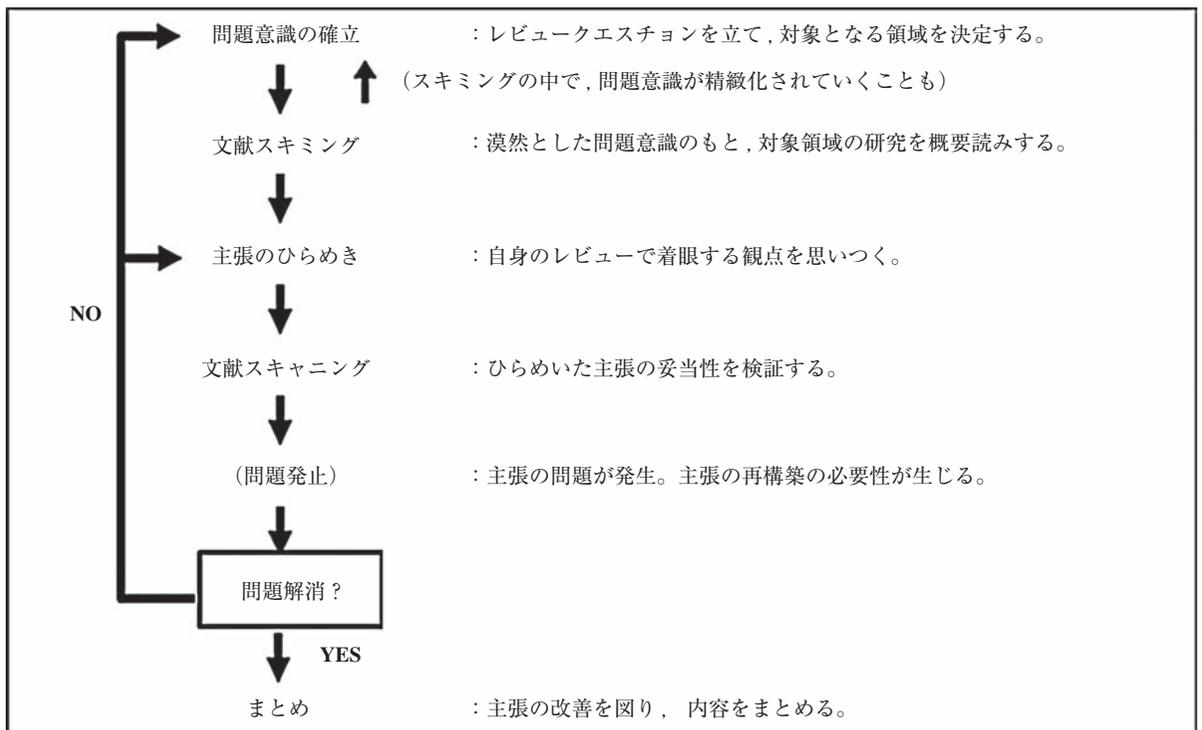


Fig. 3 レビューのプロセス (関谷, 2008 ; 深谷, 2009を一部改変)

ていたりなどの問題が生じた場合には、問題の解消を図らなければならない。それがうまくいかない場合には、もう一度問題意識を立てなおしたり、新しい主張を考えたりする必要が出てくる。

このようにレビューのプロセスを考えていくと、プロセス中にはレビュアーの思索と文献調査とが交互に起こることがわかる。文献調査とは「知識を得る」という側面、思索とは「独自に考える」という側面に対応し、両者の相互的なやり取りになっていると言える。また、レビューのプロセスには繰り返しが現れるが、それは同じことを行うような単なる円環ではなく、新しい発想へとステップアップするような、上昇を続ける螺旋のプロセスが想定されている。

以下では、プロセスの各段階をより具体的に記述する。

A 問題意識（レビュークエスチョン）の成立

レビュー活動によって何が知りたいのかを決める段階である。例えば、「自尊心が低いとどんな問題が生じるだろう？」といった比較的漠然とした問題意識が考えられる。この問題意識もその後のプロセスを経て、「低い自尊心がむしろモラルの維持につながるのではないか？」といったように発展して変化していくこともある。

問題意識が確立されるタイプとしては、「知識を得る」「独自に考える」の2側面を踏まえて、2通りあると考えられる。一つは「いろいろ知識を得た上で、自分にできることを考える」というタイプであり、もう一つは「既にどうしても主張したいことがあり、そのために文献を調べる」というタイプである。どちらになるかは人によって向き不向きがあるだろうし、また状況や場合によっても異なるだろう。十分に領域の知識や経験が無い場合には、曖昧なレビュークエスチョンから始まらざるを得ないし、経験から主張が既にある場合などには、主張が先行するということになる。

また、どちらが良いということは一般的には言えない。前者はひとまず知りたい領域など漠然とした問いを決めるが、それについて学んでいく中で自分自身のオリジナリティのある主張を見つけ出すことが困難になるかもしれない。後者は自分の主張を支持するような先行研究が見つからないとか、先行研究で既に十分主張されている、といった問題が起こって、作業をすすめてから問題の解消に苦しむ可能性がある。どちらもなんらかの困難は想定されうるが、結局のところ、

自分の態度と状況に応じた方法を取っていくことになる。

B 文献を収集する

テーマが決まったら、関連論文を収集する段階に移ることになる。最初に当該領域について広く知るためにはレビュー論文を読むことが有効である。心理学系では『心理学評論』や*Psychological Review*など、レビューの専門誌が発刊されている。そのようなレビュー誌にまずあたるとよい。通常の学会誌にも「展望論文」や「概説」などという名称でレビュー論文が掲載されることがある。

最近では、オンライン検索を活用して文献のサーチをすることがかなり普及している。心理学系の研究を得る事が出来るデータベースとしては、「PsycINFO」、*Web of Knowledge (Science)*、「CiNii」などがある。検索エンジン「Google Scholar」も有用である。これらを用いるにはキーワード検索が重要であるが、レビューの主張が明確化するとともにキーワードも変化していく。

データベースの利用では検索スキルも重要である。データベースによって利用法は異なるのでここでは詳しく述べないが、それらに詳しい周囲の人物に聞いたり、大学図書館などが行っている講習会に参加したりして、データベースをどのように使えばどんなことができるのか知っておくと文献の収集がより容易になるだろう。

しかし、思いがけない分野に発展の糸口があることもあるので、キーワード検索ばかりに頼って視野狭窄に陥ることのないようにしたい。重要な論文（核論文・キー論文）を手に入れたら、その論文において引用されている論文（引用文献）やその論文を引用している論文（被引用文献）をあたっていくと、関係が深い文献を手に入れやすい。データベースによっては、このような文献の検索も容易である。

データベースだけでなく、その分野に精通した研究者に先行研究としてどのようなものがあるかを聞くのも有効である。身近な人だけでなく、広く学会や研究会などに参加して専門家に会うのもよいだろう。専門家の意見を聞くことで、大きな示唆を得られる可能性もある。自分の属している学会以外でも、大会抄録集に目を通したりして、どのような研究がなされているのか、どのような研究者がいるのかを知っておくことは役に立つ。いわゆる「アンテナを広げておく」ということは、研究の世界ではとりわけ重要である。

C 文献を読んでいく

文献を手に入れたら、それを読むことになる。文献の読み方は2種類ある。「概要読み」と「精読」である。レビューでは特に、この2つを使い分けていく必要がある。「力を入れて読んだ論文だが、あまりテーマと関係がなかった」というのは、最初から精読をしたことにより起きた問題であり、「引用した論文の理解が不十分と指摘されてしまった」というのは、精読を怠ったことによる問題である。

とくに重要な文献は、概要読みと精読の2回読むことが望ましい。概要読みで領域を理解し、精読で問題点を精査したり、自分の立てた仮説を支持するか、といった比較的深い観点から読みこんでいく。先に概要読みをしておくことで、それが先行オーガナイザー²⁾となつて精読の際に読みやすくなるという利点もある。もちろん、2回にとどまらず、繰り返し読みこんでいくと新たな解釈や発見に至ることもある。

そうして多くの論文に目を通して、ただ読んで置いておくだけでは、忘れてしまうこともある。読んだ文献を整理しておくことで、内容を忘れないようにすることができる。上手な整理法を用いれば、知見を概観して理解するにも役立つ。論文に概要をメモしておいたり、ファイルや付箋で分類したり、あるいはエクセルやEndNoteなどのソフトを利用して整理するなど、様々な手がある。

D 問題の解消、主張のひらめきのために

オリジナリティのあるアイデアを思いつくるのは難しいことである。たとえ思い付いたとしても、レビューの作業を進めるうちに、すでに同じことを主張している著者がいるとわかったり、予想していたよりも反証が多かったり、といった問題が生じてくることもある。そのような問題を解消し、オリジナリティのあるアイデアに辿り着くためには何をしたらよいだろうか。一朝一夕に方略を見つけられるものではないが、ここではインプットとアウトプットをテーマとして、少しだけ触れておきたい。

インプットとアウトプットとは、情報処理のアナロジーであるが、それぞれ知識の取り入れと知識の外化を表す。インプットには、一見関係のなさそうな文献を読んだり人の話を聞くことが含まれ、アウトプットには、図に書いて整理してみるなどの方法がある。そしてインプットとアウトプットを兼ね備えるのが、「人に話を聞いてもらう」ことである。他者に説明する効果については、すでに活発な議論がなされている

(最近では、伊藤・垣花, 2009やRoscoe & Chi, 2007など)。アウトプットによって自分の考えを精緻化するとともに、それを聞いた他者のフィードバック(態度やコメント)をインプットすることで、改良の方向を見出すことができる。まだアイデアの固まらない時期には親しい人に思いつくまま話してみるのもよいが、ある程度形になっているのであれば、研究会など多数の人の前で発表してみるとよいだろう。広く意見を聞くことができる。

知識を得てから独自に考える場合や、まだ明確な主張が見つかっていない段階では、先行研究のインプットのみに偏ってしまいやすい。自分の主張を求めてそれまで見つけてきた知見を他者に説明したり、図に書いて整理してみたりのアウトプットをすることで自分の関心についてしっかり整理することも重要だろう。これは、「わかりやすさ」のところで述べた「考えるために書く」に相当する。

一方、独自に考えてから知識を得る場合や主張がある程度考え付いた段階には、インプットを軽視してしまいやすい。独りよがりになったり、主張に問題があるにも関わらず固着してしまうのを避けるため、様々な文献にあたってみたり、他者に意見を求めたりするインプットの作業も必要であることに配慮したい。

E レビューの完成に向けて

レビューの内容がある程度決まったら、どのように構成するかを考え、完成に向けてまとめていく。最後にもう一度、自分のレビューのセールス・ポイントは何かを振り返り、その良さを示すのに最良の構成はどのようなものかを考える。良いレビューにするためには見せ方も重要である。論文の場合には、複数人に読んでもらい、チェックを受ける。口頭発表の場合には、同じ研究室の同僚や研究上の知人を相手に、事前練習をしておく。事前練習はできるだけ早くから取りかかり、何度も練習しておいた方がよい。こうして他者に見せる事で、レビューについて客観的な意見をもらうことができる。こちらの意図がきちんと伝わっているか、よいレビューの要件が満たされているかを確認する。

5 ゼミ受講者へのインタビューに見るレビュープロセス

以上、よいレビューとはどのようなものか、そのために何をすればよいか、をまとめてきた。とはい

え、実際にどのようにレビューの作成プロセスが進むのかは曖昧さが残る。たとえば、「ひらめき」と一言で言っても、学生にしてみれば、ではどうすればひらめくのか、そこが知りたいという気持ちにもなるだろう。そこで、かつて本ゼミの受講者で、その後ゼミの発表内容をもとにレビュー論文として公刊した経験がある研究者にインタビューを行い、その経験談から考える示唆を得ることにした。質問内容としては、特定のレビュー（後述）を想定したうえで、そのレビューができあがるまでのプロセスを尋ねている。

インタビュー結果に入る前に、インタビュー回答者の二人を紹介する。一人目は村山航氏で、『教育心理学研究』に掲載された村山（2006a）と村山・及川（2005）、『心理学評論』に掲載された村山（2006b）の3本のレビュー論文について主に語ってもらった。二人目は榊美知子氏で、主として『心理学評論』に掲載された榊（2006）について語ってもらった。

A 最初から主張はあるのか

最終的に模範レビューに至るには、大きく分けて「知識を得てから独自に考える」と「独自に考えてから知識を得る」の2つの道筋がありうる。自分はどちらの方がよいのだろうと思う学生もいるかもしれない。インタビューの中では、特に最初から明確な主張があったわけではないという言葉が多かった。

「テストへの適応」を書いたときには、特に明確な主張を強く持っていたわけではありませんでした。ただ、博士論文を書くにあたって、自分のやっていたことに関連する先行研究を徹底的にリサーチしようというモチベーションだったように思います。このテーマは、あまりまとまったレビューとかがなかったのです。「○○という主張のレビューを書きたい」というのではなく、「このトピックの関連研究をとりあえず徹底的に読んで、自分のこれまでの研究を位置づけたい」という目的でした。（村山）

最初からアイデアがあった訳ではありません。レビューを始める前に、頭にあったのは、「自分の研究を進めるためには、この分野のことをきちんと勉強しておかなければならない」という必要性だったと思います。（榊）

ここでは、ある分野について十分な知識を得る、と

いうことがレビューの大きな目的として始まっている。ただし、一方では、最初から主張があった場合もあるという。

一方、及川さんと共同で行ったレビューでは最初からかなり強い仮説があったと思います。（中略）基本的に、最初から強い主張を持てるかどうかは、その領域への既有知識に大きく依存すると思いますが（知識がないと、何を主張したらいいのかも分からないので）、私はそれが（ゼミの）年度ごとにけっこう違っていたように思います。（村山）

人によって向き不向きがあるのに加え、場合によっても使い分けられるということであろう。とはいえ、村山氏が主張の存在は既有知識に依存するのではと言っているように、まったく知識のない状態から主張は生まれ得ない。経験を積んだ研究者でも、知識の蓄積のない領域であれば探索的な文献収集から始まるようである。確かに、インタビュー対象者は読んだ文献が非常に多かったという（一つのレビューを作成するのに、100をゆうに超える文献に目が通されている）。ただし、ここでいう知識とは論文や先行研究の知識に限るものではない。場合によっては、実践現場などから主張が生まれ、それを軸に論文を参照していくという方向もありうる。

ここで、以下のようなアドバイスもある。

最初からあまりトップダウン的に読まないこと。レビューは先行研究をきちんと押さえていることが前提ですので、最初から自分の観点のみに基づいて読み始めると、ひとりよがりなレビューになってしまうこともあるように思います。（榊）

最初から主張があってもよいが、論文の収集や解釈が偏ったものにならないように気をつける必要があるということだろう。

B ひらめきはどのようにうまれるか

とくに強い主張をもたずにレビュー作業を始めるなら、その途中でオリジナルなアイデアを生み出さねばならない。また、最初からオリジナルな主張を持っていたとしても、レビュー作業中に新しいアイデアが必要になることもある。何らかのアイデアを思いつくことを前節では「ひらめき」と呼んだが、レビューを試

みる者にとっては、「いったいどうすればアイデアをひらめくことができるのか」が一番知りたいところでもあるだろう。

インタビューの中では、ひらめきについて、きっかけのようなものはあまり認識されていなかった。むしろ、知識の積み重ねの中で、疑問点などが少しずつ現れてきて、(少なくとも意識上では)自然と思いつくということが起こるようだ。

残念ながら、急展開・急激なひらめきはなかったです。自分のなかの知識が、読んでいくにつれて徐々に精緻化されていって、最終的に論文のような形になったのですが、それは自分でも気づくのが難しいくらいゆっくりのプロセスで、気づいたらあのようになっていました。(村山)

最初に、その分野の中心的なレビュー論文などをいくつか読み始めて、その中で、先行研究に対する疑問点を思いつきました。それが1つ目の展開だったと思います。最終的にレビュー論文にまとめた際には、主観的定義に関する疑問点に焦点化していますが、この時点で思いついた疑問点は他にもいくつもあったと思います。そうした疑問点を念頭に置いて、今度は実証研究をたくさん読み進め、その中の特に1つ(主観的定義の問題)に関して自分なりの仮説を思いつきました。(榎)

なかなか思いつかないからといって諦めてしまわず、十分に知識を整理しながらテーマについて理解を進め精緻化していくことが重要なようだ。しかしながら、ただ漠然と読むだけではそのゆっくりとしたひらめきにもつながりにくい。

論文を能動的に読むこと。書かれていることを自分の中で体系づけながら理解しようとすることで、疑問点や批判も思い浮かびやすくなると思います。(榎)

漫然と知識を取り入れるのではなく、積極的な知識の整理・思索や、日常生活との関連づけが必要とされるということである。これに関連して、鈴木・白石・鈴木(2009)は、テキストを読む際に下線やコメントとともに「感情タグ」をつけることが批判的読解を促すことを報告している。論文を読んでいる途中で感じた、「納得できる」「反論したい」「分からない」といっ

た自分の感情を区別し、積極的にコメントを残しながら読む意識をすることで、能動的な読みが促されると考えられる。論文に書いてある内容をすべて鵜呑みにするのではなく、「本当にそうだろうか」「この方法では、別の要因が影響してしまうのではないか」「日常生活ではこのような事象も見られるが、それを説明できないのではないか」といったことを考えながら批判的な読みを進めることがひらめきの始まりである。

なお、ここまでの回答を見ると、レビューでのひらめきのためには文献を読むこととそれをもとに考えることしかないように思われるが、必ずしもそうではない。

自分なりの疑問を持ったり、アイデアがひらめいたりする際には、レビューのために読んでいた文献ではなく、別のゼミや研究会で読んだり、見聞きたりした論文や研究がヒントになることが多々ありました。その中のいくつかは、実際に論文中でも紹介しています。いろいろなところで得た知識が、自分の中でつながっていくのは、とても楽しかった記憶があります。(榎)

という回答にも見られるように、自分が選んだ論文と向かい合う時間だけでなく、実践の場や、思いもよらないところにひらめきのヒントが隠れていることがあるようだ。これは、斬新なアイデアの生成のためには自分が依拠している思考枠組み以外の考え方と出会うことが有効であるという岡田(2005)の示唆にも一致する。

重要なのは、インタビュー回答者がオリジナリティのある主張に辿り着けた要因は、ただレビューをするための作業時間内にあるのではないということだ。普段から、いろんなことを自分の関心に引き付けて考えていなければ、ふとした気付きや考えの発展も起こりにくいだろう。

そもそも、テーマを決定する、ということも難しい判断である。今回のインタビューに答えてくれたのは優れた研究業績をもつ若手研究者であって、すでに自分の研究上の関心も固まっていると思われるが、はじめからそうだったわけではない。初学者のうちは、テーマを決定するまでに、普段の生活上の関心から研究へのつながりを頭の片隅に置いていた方がよいように思われる。

C ひらめいたら終わり，ではない

多くの人にはひらめきに至るまでに苦労があると思うが、仮に何かひらめいたとして、それで満足してしまっただけ、というわけではない。前節のプロセス図における文献スキミングに対応するが、本当にそれが説得力のある主張なのかを検討する必要がある。

私は自分のモデルやアイデアを提案するのが好きなので、自分の主張やモデルを考えるという面ではそれほど苦労しなかったのですが、「客観的な証拠をきちんと集めてひとりよがりにならないようにすること」の大切さは（論文として投稿してからの）査読の過程を通して教えられました。（榊）

自分の考えたオリジナリティのある主張には本当に説得力があるのか、あるいはオリジナリティがあるのか、ということを検討するにはどうすればよいのだろうか。インタビューでは、他者とのコミュニケーションを活用しているという言葉がよく見られた。

私は今でもよく覚えているのですが、修士1年のときの後期市川ゼミのプレゼンを、榊原さんという先輩がいらっやっていた研究会で練習させてもらいました。そのときの榊原さんが「詰め込みすぎだ」ということを（具体的な改善案とともに）ストレートに指摘してくださって、ゼミ本番の発表がぐっとよくなりました。（村山）

さらに、「他者の目」を想定することについて、次のような言葉もあった。

自分のモデルや枠組みに関して想定される批判があればそれを考察することも大切でしょう。（榊）

専門家と学部生の両方を読み手に想定すること。（中略）（学部生）を読み手として想定することで、極端に細かい議論になりすぎず、分かりやすいレビュー論文を書けるように思います。（中略）専門家が読んでも、納得してくれるようなレビューを書こうとすることで、客観的で説得力のあるレビューに近づけるような気がします。（榊）

ここでは、他者の目が自分の中に内化され、「自分

の中の他者」が主張を吟味する役割を担っている。常に他者が自分のレビュープロセスをモニタリングしてくれるわけではないため、ある程度は自分で自分の主張に批判を加えねばならない。仮説を検証する際に、仮説を支持する証拠が選択的に収集あるいは認知され、反証が軽視されるという確認バイアスが知られているが、このように他者を想定して反省的に見ることによって、確認バイアスに陥らず自らのレビューに手を加えやすくなる。道田（2006）は自分の視点に自覚的になり、視点を他に動かしてみることができると批判的思考の重要な点としているが、これはまさにそのような批判的思考が行われているということもできる。

研究者としての経験やレビュー対象の分野について知識がまだ少ない段階では、おそらく「自分の中の他者」によるメタ認知的なモニタリングは充分でなく困難と思われるが、経験を重ねることによって、より身についていくのであろう。岡田（2005）が、創造的熟達者が備えているアイデアを評価するメタ認知能力について、継続的な創造活動によって獲得されると述べていることが、ここにあてはまる。

以上、本ゼミの発表をもとに実際にレビュー論文を公刊した若手研究者へのインタビューから、よいレビューに至る方法に対して示唆を得ることができた。しかし、このインタビューも少数人数に対して行ったものからさらに2人のみを抽出した経験談であり、偏りがあることは否めない。また、質問内容もこの論文の目的に沿って、レビュープロセスに絞っている。初めてレビューをしようという学生には、周囲のレビュー経験者からさらに多くの情報を得て参考にしてほしい。

なお、そもそもレビューというものをしようというモチベーションが生まれたきっかけについてはインタビューで尋ねていない。そもそも自分にはレビューをする予定がない、という学生に対して、レビューをすることの利点を述べておきたい。

まず、レビューをすることが自分の研究を改めて考え直すきっかけになるという点だ。先行研究を知ってそれを整理しなおすだけでなく、巨視的な視点からオリジナリティのある主張を生み出すことができるし、レビューはまたそれをめざすべきである。それによって、自分の研究の新たな方向性が見えてくるはずだ。また、インタビュー回答者に見られる批判的思考や自己のレビューをメタ認知的に評価する力が、実際にレビューをする経験を積むことによって確実に育成されると考えられる。

6 結語：あらためて「よいレビューをするには」

本論文では、良いレビューを文献の網羅性が高く、自己のアイデアが込められているもの、「模範レビュー」として、どうすればそれが達成できるか、そのプロセスを論じてきた。しかしながら、「この作業をすれば必ず模範レビューに至る」というものではない。オリジナリティという、いくぶんあいまいでレビューの中にそれが出せるかが手続き化されていないものが重要であると述べたことで、具体的にどうすればよいのか不安に思う学生もいるかもしれない。

しかし、本論文では、オリジナルなアイデアを生み出す参考にしてもらうため、どのような方向性をもってレビューに取り組むかということには様々なパターンがあることを示すとともに、オリジナリティのある主張に至るために必要な態度や活動についても紹介した。少なくとも、「最初から発想力のある人だけがよいレビューをすることができる」というものではない。また「発想力さえあればよいレビューをすることができる」というわけでもない。どのようなレビューがよいレビューなのかというイメージをもって、その方向に向けた継続的な努力こそが必要不可欠であることを最後に強調しておきたい。

注

- 1) 独立変数と従属変数の関係に影響を与えている第3の変数について検討すること。例えば、ストレスイベントが抑うつに与える影響の大きさが性別によって異なる場合、性別が調整変数であるといえる。
- 2) これから学ぶ内容についての概念的枠組みのことであり、これが与えられることによって内容の記憶が促進される (e.g. Ausubel, 1960)。

引用文献

- Ausubel, D.P. (1960). The use of advance organizers in the learning and retention of meaningful verbal material. *Journal of Educational Psychology*, 51 (5), 267-272.
- 市川伸一 (2000) 『勉強法が変わる本—心理学からのアドバイス—』岩波書店
- 市川伸一 (2001) 研究の展開—研究計画から発表・論文執筆まで— 南風原朝和・市川伸一・下山晴彦 (編) 『心理学研究法入門』東京大学出版 pp. 219-240.
- 伊藤貴昭・垣花真一郎 (2009) 説明はなぜ話者自身の理解を促すか：聞き手の有無が与える影響 *教育心理学研究*, 57 (1), 86-98.

- 道田泰司 (2006) 思考のパースペクティブ性に関する一考察 *琉球大学教育学部紀要*, 69, 95-106.
- 岡田猛 (2005) 心理学が創造的であるために—創造的領域における熟達者の育成 下山晴彦 (編) 『心理学論の新しいかたち』誠信書房 pp. 235-262.
- Roscoe, R. & Chi, M. (2007). Understanding tutor learning: Knowledge-building and knowledge-telling in peer tutors' explanations and questions. *Review of Educational Research*, 77 (4), 534-574.
- Rosenthal, R. & DiMatteo, M. R. (2001). Meta-analysis: recent developments in quantitative methods for literature reviews. *Annual Review of Psychology*, 52, 59-82.
- 芝祐順・南風原朝和 (1990) 『行動科学における統計解析法』東京大学出版会
- 心理学評論刊行会 投稿・執筆の規定 (2011年改訂)
- 鈴木聡・白石藍子・鈴木宏昭 (2009) マーケティングと感情タグの付与によるライティング活動における批判的読解の誘発 情報処理学会研究報告, コンピュータと教育研究会報告, 15, 97-104.
- 丹後俊郎 (2002) 『メタ・アナリシス入門—エビデンスの統合をめざす統計手法』朝倉書店

参考文献

- 村山 航 (2006) テストへの適応—教育実践上の問題点と解決のための視点— *教育心理学研究* 54 (2), 265-279.
- 村山 航 (2006) 再認記憶の二重過程モデル—測定法の問題点と“多層的な枠組み”の提案 *心理学評論* 49 (4), 569-591.
- 村山 航・及川 恵 (2005) 回避的な自己制御方略は本当に非適応的なのか *教育心理学研究* 53 (2), 273-286.
- 榊 美知子 (2006) エピソード記憶と意味記憶の区分—自己思惟的意識に着目して *心理学評論* 49 (4), 627-643.

ゼミ資料

- 榊美知子 (2006) よいレビューとは何か? (前半) 2006年度後期市川ゼミ発表資料
- 植阪友理 (2006) よいレビューとは何か? (後半) 2006年度後期市川ゼミ発表資料
- 篠ヶ谷圭太 (2007) よいレビューとは何か 2007年度後期市川ゼミ発表資料
- 関谷弘毅 (2008) よいレビューとは 2008年度後期市川ゼミ発表資料
- 深谷達史 (2009) よいレビューとは何か 2009年度後期市川ゼミ発表資料

謝辞

この論文は、榊美知子さん、植阪友理さん、篠ヶ谷圭太さん、関谷弘毅さん、深谷達史さんを始めとする市川伸一研究室の歴代学生の皆さんのアイデアの積み重ねによるものです。論文執筆に

あたっては、植阪友理さん・深谷達史さんによるアドバイスをいただきました。皆様に心より感謝いたします。また、インタビューに答えてくださった村山航さん、植阪友理さん、榊美知子さん、実藤和佳子さんによって、具体的なレビュープロセスについての思いを知ることができました。厚く感謝いたします。